

七日、錦県に移駐すべく先発して大隊本部と行動を共にする。昭和二十年八月九日、ソ連軍侵攻の情報聞いた。平泉の後続すべきはずの第三中隊が錦県に到着せず、そのまま八月十五日、終戦を迎えた。その後遼陽にて武装解除されたが終戦のことを知らさず、兵や一般人たちの秩序を維持しつつ居留民らを助けた。

昭和二十年十月十八日、海城を出発。貨車輸送により満州里を経由して人ソしたようです。

昭和二十二年十一月十九日、復員した。

帰郷後は農業を営み続けて今日に至っているが、この間、農協理事として活躍し、誠実に尽力された功勞は立派であり、また昭和五十三年の中旬頃から旧田柄川村出身のシベリア抑留者十二名により結成された「思ひ出会」を開催する。また、シベリア抑留中に死没された戦友たちの冥福を祈りつつ十七年間、全抑協運動に協力してきてくれた有能の士であると思います。

(和歌山県 嘉成 一郎)

「生かされて」ダモイ

石川県 餅井 茂

一、渡満・入隊

流れ流れて 落ち行く先は

北はシベリヤ 南はジャバよ

いずこの土地を 墓所と定め

いずこの土地の 土に終らん

大正の終わり頃かに流行した「流浪の旅」というこの歌が好きで、よく口ずさみ、シベリアを連想したこともあつたが、そのシベリアに、まさか捕虜として四年間も抑留されるとは、神ならぬ身の知るよしもないことだった。

私は昭和十八年一月、満州興農合作社に入社するため渡満し、四月に興安東省喜扎嘎爾旗興農合作社に赴任して、入隊するまでここで経理係、業務係として勤務した。

昭和二十年二月に徴兵年齢の繰り上げで十九歳で徴兵検査を白城子で受け、第一乙種現役兵に合格した。

入隊したのは五月十七日、入隊先は満州第七三七部隊（ハイラル野砲隊）で、三中隊三小隊の初年兵小隊に配属され、翌日から新兵教育でしぼられた。

六月に入って「の号演習」に参加し、終わって帰隊したら部隊の編制替えがあり、同班の戦友二十名が突撃大隊に転属して、部隊名も第二五二九一部隊（迫撃砲大隊）となった。この突撃大隊は爆弾を抱いてソ連戦車に体当たりする部隊で、ほとんどの戦友は戦死した。

七月中旬ごろにノモンハン近くの陣地構築に出動したが、作業途中に急遽引揚げ命令が出て、夜半に輜重車を引いて帰隊した。帰隊後、古兵に混じって迫撃砲の操作訓練に汗を流し、八月に入って一期の検閲を終えた。そして三日後の払暁、兵舎が爆撃されて初めてソ連の参戦を知り、慌てて陣地行きの準備をし、輜重車に砲、弾薬、食糧などを積んだが、この間三回の爆撃を受け、どうにか出発して二地区陣地に上ったのは

九日夕方ごろだった。

二、戦闘

三中隊はこの陣地西側中腹に布陣したが、翌朝陣地移動し、近くの旧弾薬庫付近に掩体壕を掘って迫撃砲を据えた。

「ソ連軍が近づいた」と知らされたのは十日の夕方ごろで、砲撃してきたのは十一日朝からだ。三中隊の迫撃砲もこれに応戦して砲撃したが、一発撃つと三、四十発ほどお返しがる集中砲火を浴び、慌てて砲を分解搬送して弾薬庫に潜んだ。

ドツカン、ズツシン、ミシミシと、今にも弾薬庫の穴蔵が崩れ落ちるのではないかと思うほどのものすごい砲撃だった。しかし我が方から反撃する大砲の音は聞こえず、他の部隊がどこにいるかも不明だった。

翌日から、集中砲火を避けるため、敵が砲撃する前の朝方、迫撃砲を四、五十発撃っては穴蔵へ逃げ込むのが日課となった。

二、三日たった夕方ごろ、下のソ連軍陣地から拡声器の音が流れてきた。途切れ途切れのため内容は分か

らなかつたが、後日、これが「日本は敗戦した。お前たちは降伏して出てこい」との降伏勧告だったそうで、この日は八月十五日だった。

翌十六日、友軍機の飛来を見た。そして十七日夕方、中隊長から「我々の任務は終わった。今晚総攻撃をかける」との命令が伝達され、各自に小銃弾五十発と手榴弾二発が渡された。夜、壕で待機していたところ、夜半に引揚げ命令が出て、全員穴蔵に戻り仮眠した。

三、降伏

十八日、夜明けとともに全員集合がかかり、中隊長が、重大発表があつたと前置きして「日本帝国はポツダム宣言を受諾したので、我々もソ連軍と停戦することになった」との本部命令が伝達された。一瞬皆シーンとしたが、そのうち「日本が負けたのだ」ということが分かる、涙がポロポロと流れ、あちこちから嗚咽が聞こえてきた。

穴蔵の外へ出たら、雨の降る中を白旗を掲げた軍使の一行が陣地下へ降りて行くのが見え、敗戦の実感が身にしみてまた涙が出て、横の戦友たちと声を上げて

泣いた。

しばらくしてソ連兵に武装解除され、一人ずつ身体検査を受けた。私の番になって、検査していた蒙古人の下士官が目の前で突然倒れたため、付近にいたソ連兵四、五人が何か叫んで私を取り囲み、銃剣を突き付けた。びっくりして両手を上に上げたが、何が何だかさっぱり分からない。そのうちやつと解放されて、ホツとして隊列へ入った。

どうやら、時折、下から砲撃していたソ連軍の砲弾の破片が当たつたらしいが、こちらはすんでのところ、で射殺されるどころだった。

このあと陣地下に集められたが、あちこちに戦死者の遺体が幾つも転がつており、その中を五列に並ばされて歩き、東山兵器廠跡の收容所へ入れられた。ここには兵隊のほか民間人や婦女子、負傷兵、それに朝鮮出身の兵隊もいて、総勢で四、五千ほどが收容されていた。

四、五日してジャガイモ掘りの使役に出たが、留守中に收容所の移動があり、戻ったら残留部隊の中に組

み込まれて、ハイラル駅裏の満鉄社宅跡の収容所へ移動した。ここには先発部隊もあり、私がいた三中隊の戦友たちもいたが、シベリアからダモイまでについて一緒にいることはなかった。

この収容所に入ってから毎日、東山倉庫の物資の貨車積みさせられたが、この使役は十月終わり頃まで続いた。

四、一路シベリアへ

十一月に入ると北満にも白いものがちらつき、第一梯団千五百名が先発として出発したのは十一月十八日、その一週間後に私らも第二梯団千五百名として出発した。もちろんダモイを信じ、私物をいっぱい持って貨車に乗ったが、狭い貨車の中は荷物と人でいっぱい。座る場所もないほどの混みようで、そのうえ、排便の臭いが立ち込めて息がつまるようだった。

昼過ぎにハイラルを出発し、途中満州里まんちゅうり駅で給水して、夕方にはソ連領に入っていた。翌朝見たシベリアの原野は白一色で、その鉄道沿線には機械類、トラック、ドラム缶、燃料などが雪をかぶって野積みされ、

延々と続いているのが見えた。これがすべて満州からの略奪物資であると知りびつくりした。

時折停車した駅では我先にと排便に走ったが、先客の置き土産で足の踏み場もなく、場所探して少し離れたものなら「パン、パン」と発砲され、用足するのも命がけだった。

途中「海だ、灯台も見える」と騒いだバイカル湖の辺りを通り、更に五日ほどして、夜中に停車した駅で全員降ろされた。降りた途端、鼻がツーンとしてまっげがパリパリになり、なんと寒いところに来たものかと思った。

全員五列に並ばされて点呼を受けたあと、重い荷物を持って雪道を二時間ほど歩き、望楼のある高い板塀囲いの中に入れられた。ここがアンジェルカの収容所だったが、ここでまさか四年間も暮らすとは思ってもみなかった。

五、私物検査

板塀囲いの中には丸太作りの数棟の建物があり、その一つに入れられたが、部屋は上下二段の蚕棚の寝台

になっており、畳一枚分ほどの所へ三人が詰め込まれた。藁布団もなければ毛布もないので、外套を着たまま互い違いになって寝たが、夜中用足しから戻ると寝る隙間がなく、また、押し出されてドゥスンと下に落ちる人もいた。このギューギュー詰めの寝台は、一カ月ほどして五百人が西炭坑へ転属するまで続いた。

入って二日ほどしたら突然「荷物を持って全員集合」の命令が出て、雪の降る所外の広場に集められた。このときは「収容所の移動だ」とか「急にダモイ命令が出たのではないか」などと憶測もしたが、目的は私物検査で、ほとんどの持物を取り上げられ、残ったのは飯盒、水筒、雑裏に日用品少々だけとなってがっかりしたが、寝る分には少し余裕ができた。

この検査の後は蒸し風呂と滅菌消毒だったが、お陰でシラミの被害に遭うことはなかった。しかし南京虫にはよく食われた。

六、ラーゲル暮らし

この収容所にも〇〇収容所第〇ラーゲル〇分所という正式名称があったと思うが、正式名称も知らないか

ら、単にアンジェルカの収容所（ラーゲル）と呼んでいた。

敷地は広く（約一万平方米メートル）、中央の食堂棟を取り囲むようにして隊舎、本部棟、医務棟、浴場があり、ウボルナヤは北側隅にあった。周囲は高い板塀に囲まれ、その内外に有刺鉄線があり、四隅の望楼にはカンボーイ（監視兵）が常時監視していて、警戒は厳重を極めていた。

収容所側の捕虜の取扱いは厳しく、「ノルマが足りない」「兵隊の働きが悪い」「所内が汚い」などと常に文句をつけられ、特にノルマについて達成率の悪い組の人が一週間ほど厳冬の地下営倉に入れられたのをはじめ、ニエラポーター（不良労働者）として何人かの人が次々と営倉に入れられたことがあった。

一方、日本軍側は、原中佐（第八〇旅団参謀）が梯団長で、将校、兵隊、民間人を含めて千人ほどだったが、ダモイした人や死亡した人の欠員は、転属者で補充されていた。

入ソ後も軍隊組織はそのまま、軍律も厳しく、あ

るとき、食堂帰りに古川少佐に欠礼したところ、「コ
ラツ兵隊、敬礼をせんかッ」と怒鳴りつけられたこと
があつた。

また、半年ほどして下士官以下の兵隊が参謀名によ
り一階級進級したが、ほとんどの兵隊は「今更階級で
もあるまい」と、階級章をそのままにしている人や着
装しない人も多かつた。この軍隊組織は、民主委員会
が指導権を握るまでの、二十三年初めころまで続いた。

七、食事

捕虜にとつての楽しみといえば食うことと寝ること
だけだったが、この食事たるやまことにお粗末なもの
で、一日量は、黒パン一食（約三〇〇g）に、朝と夕
方は粟か高粱のお粥で、これに菜っ葉の入った塩汁だ
けだった。

特に二十一年に入ってから食糧事情が極端に悪くな
り、一日量は、黒パン二五〇g、雑穀と野菜が二〇〇
gに減らされた。この雑穀は燕麦大さじに三杯（五〇
g）だったが、炊事ではこれを冷凍ジャガイモといっ
しよに炊き込んだイモ粥にして、食器に七、八分目ほ

ど支給された。しかし、水気の多いお粥ではすぐお腹
が減る始末だった。

一方、労働のノルマは厳しく、ニエラポーターは更
にパンが減量されて、その分がハラシヨラポーターに
増配され、三倍ほど大きいパン（最高六〇〇g）を
もらっている人を羨望の目で見つめたものである。

このころは皆、餓鬼道に落ちていたから、食事やパ
ンの分配時には、それこそ血眼になつて大きめのもの
を狙つたものである。この空腹を少しでも満たそうと、
春になると雑草を手当たり次第に採つてきて食べたが、
所内のウボルナヤ付近に自生していたアカザは柔らか
く、最高においしいと珍重がられた。また秋には山か
ら茸を採つてきて食べたが、茸中毒で何人かの人が命
を落としていた。

食糧事情が少し良くなつてきたのは二十二年の後半
ごろからで、その後、一日の食事は、黒パン三五〇
g、雑穀と野菜が四〇〇g、これに砂糖が一八gとな
つたが、これはタモイの時までこの規定量で支給され
た。しかし満腹感はなかなか味わえなかつた。

八、医療

病氣になった人は医務室で軍医（主に日本軍医）の診断を受けて休養することができたが、腰痛や神経痛などで外部所見のないものは病氣としてほとんど認められず、発熱は三七度五分以上が休養基準だった。

また、患者に対する施薬や治療はほとんど行われず、私も三九度の発熱で十日間ほど入院したが、薬一服与えられず、またランプ係のときバッテリーの濃硫酸が目に入って失明寸前になり、市の病院へ行つたが、ろくに治療もせず、目薬一滴差してもらえなかった。

また、栄養失調は病氣として認められなかったから、これにかかった人は寒さと重労働に耐えられず、毎日二人、三人と亡くなつていった。何人亡くなられたか正確な人数は分からないが、事故死も含めて百人ぐらゐのの人たちが亡くなったのではないかと思つている。

九、炭坑労働

当初は駅の除雪、貨車積み、建築現場の穴掘りなどの作業だったが、二十一年の春ごろから、一交代二百人、三交代で六百人ほどの人が炭坑労働に従事するよ

うになった。

この炭坑作業に従事する人は、毎月一回行われる身体検査で一級（ペルウエ）に指定された人が入り、二級（フタロイ）は地上の建設現場、三級（テリーチエ）は所内の軽作業、四級（チトヴョルトイ）は休養か入院と、大体このような等級区分だった。

この身体検査は、ソ連軍医が素っ裸になった兵隊のお腹の皮を引つ張つたりお尻の肉をつねつたりして決めるもので、我々の知つている身体検査とは大違ひだった。そして、この軍医ほどの程度の専門知識があつたのか、今でも疑問に思つている。

坑内労働は三交代制で、早出組（午前八時から午後四時）、中出組（午後四時から十二時）、晚出組（夜十二時から翌朝八時）に分かれていて、交代の切替えは毎月一日に行われた。

坑内業は、採炭専門の組と隧道ずいどうを掘る組とに分かれ、どの組にも先山、後山があり、先山はハツパで穴をあけて丸太で木枠を組む仕事、後山はこの支柱の丸太運びと石炭の積み込みが仕事で、先山一人に後山四、五人

がついて一班を作り、これにソ連人の監督助手が一人ついた。この助手には人のよさそうな者もいたが、ほとんど囚人上りの気性の荒いのが多く、こんなのに一日中横でダワイダワイをかけられた日には頭がくらくらしただけである。

十、ソ連人をやっつける

あるとき、この意地悪ソ連人にダワイをかけられて殴られたので、やっつけたことがある。これは二組で働いていたときの話で、晩出のときのことである。

この日の監督助手はタタール人で実に口のうるさい大男だったが、交代間近いころ、石炭積みをしていた私の傍らへ来て、「ヴィストラダワイ」と怒鳴りながらやにわにスコップの柄でお尻を殴ってきた。なんで殴られたのか分からず「この野郎」と思ったが、反抗できない捕虜の悲しさ、じっと我慢した。

ところが、「ヨッポイヤポンスキー、ニエラポータ」などと言ってなおも殴ってきたので、ついに堪忍袋の緒が切れ、「何がニエラポータだ、この野郎」と怒鳴り返し、とっさに胸ぐらを掴んで身を屈め、背

負って投げたらそのまま向こうに飛んでいった。「ウオーツ」と大声を上げてすぐ立ち向かってきたので、足払いをくわせてそのまま押さえ込んだ。そのとき、下の方から「どうしたんだ」と新開上等兵が走ってきて、「やったのか」と言うなりソ連兵の脇腹を蹴飛ばし、左腕をねじ上げた。ソ連兵はヒイヒイ言いながら暴れたので、首を締めたら少しおとなしくなった。

しばらくすると下の方から交代が上がってきたので、押さえられていたソ連兵が大声をあげて助けを求めた。交代のロシア人は「ヤポンスキー、ネルジャ」（悪いからやめろ）と言って、そのまま通り過ぎて行った。このあと日本人の交代が五、六人来て「もつとやれ」とけしかけ、通りがけにソ連兵の脇腹を蹴飛ばし、現場へ行ってしまった。

そのうち辺りが静かになつてきたら心細くなり、新開君と相談して、一、二、三で手を放し、一目散に上の横穴へ逃げた。ソ連兵は大声をあげて追ってきたが、横穴まで来なかつたのでそのままここで休み、四、五十分ほどして地上へ上った。ところが、エレベーター

の入口に児島通訳が待っていて、「今、ソ連兵が『ヤポンスキーに殺されそうになった、すぐ捕らえてくれ』と怒鳴りこんできた。カンボーイが怒って全員を風呂場前に並べて首実験したところだ。まだ危ないから穴の中へ入って隠れている」と興奮した口調でせき立てた。こちらもびっくりしてまた横穴へ戻り、一眠りした。

二時間ほどして「もう大丈夫だろう」と風呂場へ行ったが、だれもおらず、急いでシャワーをして、戻ってきた児島通訳に連れられて収容所へ帰った。道々「ラーゲルへはもう連絡がいつているだろうか、すぐ営倉へ入れられるのではなかるうか」と話しながら歩いたが、収容所が近くなるとやはり胸がどきどきしてきた。児島通訳が衛兵所の中へ入ったが、なかなか戻らず、しばらくしてソ連将校が出てきて「アックロワイ、ダワイ」（門を開ける）と声をかけ、大扉が開かれた。「ちょっと待て」と言われるのではないかとはらはらしたが、カンボーイが手で合図したので一目散りに中に走り、そのまま食堂へ駆け込んで、ホッと胸を

なでおろした。「よかったな」と新開君と話しながら、遅い朝食を食べて中隊へ戻り一寝入りした。

夕方になったが、収容所側から何のお咎めもなく、本部からも別に注意はなかった。その日も晩出で、二組の事務所前へ行ったところ、昨日の喧嘩相手のソ連兵がおり、私を見つけて横へ飛んできて、「ヨッポイヤボン、ザラーク」（お前は監獄行きだ）と怒鳴り、拳を振り上げて殴りかかってきた。とっさに「何を、もう一遍やつつけてやるか」と声を出して身構えたら、何かぶつぶつ言いながら引き下がっていった。しかし、その日は一日中緊張の連続だった。

収容所の中では私とソ連兵の喧嘩がその日に知れわたり、これがきつかけとなったのか、あちこちの中隊でもソ連兵をやつつけた武勇伝が毎日のように伝わってきた。そのうち、二中隊の下士官が坑内でソ連兵と大立ち回りをやって頭に怪我をさせる傷害事件を起こしたため、収容所側から「今後一切ソ連人と喧嘩してはならない、怪我を負わせた者は裁判にかける」ときついお達しが出され、これを機に、さしも毎日起きて

いたソ連兵との喧嘩騒動も一度に治まった。そしてこの一件以後、「ヤンボスキーに手出しするとひどい目に遭う」と思ったのか、坑内での口うるさいダワイも少なくなり、理由もなく殴ることもなくなつて、ノルマのごまかしにも少し歯止めがかかったのではないかと思つている。

しかし考えてみると、捕虜が反抗したのだから、戦前の日本軍なら「捕虜の分際で」ということで銃殺されるか半殺しの目に遭つても文句の一つも言えないのに、何の処分も受けずに無事助かつたのだから、今思ひ出しても何か背筋が寒くなるような気がする。

十一、民主化運動

收容所内に民主化指導紙として「日本新聞」が配布されたのは昭和二十一年の終わりごろからで、これが各中隊に三、四十枚ほど配られたが、読む人はほとんどおらず、すぐ細かく切つてマホルカ（きざみたばこ）の巻紙に使つていた。その後、所内に民主化運動の兆しが見え始めたのは、二十二年の初めごろに十人ほどの人（下士官と兵隊）が地区政治学校を卒業して

收容所に戻つてきてからだつた。

この政治学校を卒業してきた民主化グループの人は、その後（日本新聞友の会）（党史研究会）を開き、同志を糾合して反軍闘争を指導し、民主化委員会を結成して、ついに收容所内の指導権を掌握した。このため、今まで收容所内の実権を握つていた原参謀ら将校は、このあと、どこかの收容所へ転属して行つた（二十三年の初めころ）。

新しくできた民主化委員会のメンバーは地区政治学校を卒業してきた人たちを中心に構成され、また、各中隊の幹部も執行部が任命した人たちが座つた。この人たちは元警察幹部や教員、新聞記者などで、過去の経歴や学歴を買われて任命されたようである。

民主化委員会が発足してから所内でも民主講習会が開かれるようになり、ダモイするまでに八期二百人ほどが受講している。民主化運動が高揚してきたのは昭和二十三年中ごろからで、このころは「民主化が即ダモイに繋がつている」と一途に信じ込まされていたから、この民主化の流れに遅れては大変と、みな真剣に

民主化闘争に取り組んだ。

昭和二十四年に入るとダモイの噂話が具体化して、その準備のため全員が炭坑労働から地上作業切替えになったのは五月ごろで、ダモイの命令が出たのは六月中旬だった。

このとき、収容所側から「炭坑労賃で一定額以上を積立していた分」が一括支給されることになり、稼ぎ高にに応じて全員に分配することになったが、分配間際に青年部から「世話になった執行部の人たちに何かお礼をしてはどうか」との提案があり、一人五ルーブル、総額で四千ルーブルほどを拠出して贈った。もらった執行部の人たちは、この金で揃いの背広、ネクタイ、レーニン帽（いずれもグリーン色）を買い、これを着てダモイした。ところが、これが後日ナホトカで大問題になるうとは、このとき、だれも思いもしなかった。ダモイの貨車に乗ったのはアンジェルカ梯団千名だったが、往きと帰りで違ったのは、一つは貨車の扉に鍵がかかっていない、二つは停車ごとに自由に外に出られた、三つはカンボーイの警戒がなかったことだっ

た。

途中での用足しは停車ごとに貨車の下に潜ってやったが、先客の置き土産で足の踏み場もないのは往きも帰りも同じで、冬場と違って凍結していないだけに始末が悪かった。

十二、ナホトカの嵐

ナホトカに着いたのは出発してから十五日目の朝で、貨車を降り近くの海岸で待機した。私らの後から次々とダモイの梯団が集まってきたが、そのうち、あとから来た梯団が移動し、私らだけが砂浜に取り残された。「少し様子が変だ」と感じたが、しばらくして我々の梯団も移動して収容所へ向かった。

収容所に近づいたところ、二、三千人のデモ隊がスクラムを組み労働歌を歌いながらぶつかった。このデモ隊と押し合いもみ合いしながら収容所の門を潜った。ところが、中に数千人のデモ隊が待ち構えていて、ウワーツというような喚声と労働歌がなり立てて我々の梯団を十重二十重に取り囲み、デモの渦の中に巻き込んだ。埃がもうもうと立ち、雑糞や服の袖

がちぎれるほどみくちやにされたが、広場のようなところへ出てどうにかデモの囲いから脱出することができ、ホッと一息入れた。

皆、このデモの歓迎で汗びっしりになったが、

「何でこんなすごいデモの歓迎を受けたのだろうか」と不思議に思った。しばらくしたらナホトカのアクチーブがやってきて「君らの梯団は反動に指導された集団で、間違った民主化運動をやってきた」と批判されて、初めてその理由が分かった。ナホトカのアクチーブが批判していたのは、一つは、執行部が兵隊の賃金を搾取した（兵隊から集めた金で背広など買った）ことと、二つは、指導者のほとんどが前歴者、反動であることだった。しかし、執行部が批判される以上、我々の民主化運動も「似非民主化運動だ」と当然批判されているわけで、これによってダモイが取り消され、ナザートになるのではないかと、皆一様に危惧した。

このあと梯団の集会が開かれて執行部は全員失脚し、新しい指導部が選出された。失脚した指導部の人たちはその後政治部将校の取調べを受け、また前歴者（憲

兵、特務機関）の人たちも摘発されたそうである。梯団は新しい体制で発足したが、反動集団と目されたため特別扱いされて毎日所外の労働に駆り出され、その後三週間ほどして第二收容所（ナザート收容所）へ移動した。

ここではダモイから取り残されたら大変と皆真剣に日常闘争に取り組んだが、十日ほどして突然、第三收容所（ダモイ收容所）への移動命令が出て、ここでの最後の指導を受け、八月九日、夢に見たダモイ船、第一大拓丸に乗船することができた。

ナホトカを出港してからでもしばらくは「その船待て」と呼び戻されるのではないかと不安がつきま続したが、八月十二日無事舞鶴港に入港し、復員手続を終えて、八月十七日に我が家へ帰った。故郷を出てから、ちょうど七年ぶりだった。

十三、生かされて「ダモイ」

引き揚げた当時は、まだ終戦の混乱が続き、レッドパージで失業者が溢れ、そのためシベリア帰りには職がなく、あちこちの試験を受けたが駄目で、どうにか

梟警に採用されて奉職することができたのは翌年七月だった。ここを無事定年まで勤め、その後私学職員として再就職し、今年三月で退職した。

仕事を離れ、子供たちもそれぞれ独立した今、平和な暮らしの中で時折当時のことを振り返り、「よくあの苦しい中を生き永らえ、ダモイできたものだ」とつくづく思っている。

寒さと空腹と労働の疲れでも言う元氣さえなく、朝起きたら隣に寝ていた戦友が冷たくなっているのに氣づき、人の命のはかなさと無情を感じたことも二度三度ではなかった。この死と隣り合わせの苦しい中をなんとか生き抜いてくれたのを、単に「運が良かったから」とか「生きる力が強かったから」と、簡単に割り切ることができるのだろうか。私自身も特別人より体力に優れていたわけでもなく、また強靱な精神力があつたとも思えず、それに信仰心もあまり持っていないことを考えたとき、なおさらこの思いが強くなり、これがいつまでも心の中に残っていた。

人の一生は「その運命によつて左右され、人間の意

思では選択できない宿命だ」といわれており、また辞書によれば、「運命とは、超自然的な力によるめぐり合わせ、天命によつて定められた人の運」とあつた。

このことから考えると、満州からシベリアのラーゲルにかけてたぐさんの人と出会い、また多くの戦友の死にも直面してきているが、この人たちとの出会い、めぐり合わせがあつたからこそ現在があるのではなからうか、という氣がしてきた。そして最近、満州開拓団からの引揚者の手記を読んでから一層この思いが強くなり、「自分一人の力で生き延びてきたのではない。

周囲の人たちに助けられ、亡くなった戦友たちの御霊に守られて、生かされてダモイすることができたのだ」と氣付いたとき、今まであれこれと考えていた雑念が消えて、やっと心に安らぎを得ることができた。

私には宗教的な難しいことは分からないけれど、「生かされて生きてきたのだ」と知つた今、自分がこうして生きていくことの素晴らしさを大事にして、これからの人生を有意義に送りたいと願っている。

【執筆者の紹介】

筆者の餅井さんは石川県美川町の出身。ここは白山の清冽な水が石川平野を潤して日本海に注ぐ手取川の河口にある町で、幕末までは日本海を往来、交易した「北前船」が寄港した港町として栄え、明治になって一時、石川県庁が置かれたほどである。

進取、積極の気風に溢れ、北海道、樺太に移住して活躍した先輩にならない、昭和に入ると中国大陸を目指す青年が多かった。

餅井さんも昭和十七年、県立農学校を終えると、既に渡満している次兄（満州電々公社）、三兄（満州航空KK）の後を追って渡満、日本の「全国農協」に当たる満州興農合作社に入社、満州の西部、興安嶺を望む大広野に立って、赤い夕陽に照らされることになった。

二十年二月、遠く白城子まで出掛けて受けた兵隊検査は第一乙種。大東亜戦争がいよいよ難局にさしかかった同年五月、軍部ハイラルの野戦重砲、七三七部隊に入隊した。

逞しい挽馬が曳く重砲を相手に一期の教育が終わったか終わらぬとき、国境の向こう側に、満を持していたソ連軍が潮のごとく侵攻してきた。

ハイラルには地下要塞も設け万全を期していたのだが、肝心の精鋭部隊は大砲と共に南方に去っており、餅井さんらは花火屋の火筒のような迫撃砲を急遽訓練して布陣、砲身の先から弾丸を落としては発射、一発のお返しに百発も飛んできてはコールドゲームもいところであった。

一発でも撃ってソ連軍に抵抗した部隊は、ソ連に送られても懲罰的にひどい収容所に送られた傾向があったが、餅井さんの大隊も旅団参謀を大隊長にしてシベリア鉄道を西へ西へ、ウラルに近いノボシビルスクの手前、アンジェルカ（五二六地区）へ送られた。

アンジェルカ（正しくはアンジェロ・スージェンスク）はボタ山の並んだ炭鉱の町で、先着のドイツ人の収容所があるほか、ロシア、タタール、キルギス共和国の人々が炭鉱で働き、原住民の娘たちにも坑内でスコップを持って汗を流す者もいた様子である。

北緯五十六度のここで三年十カ月身を削った餅井さんは、昭和二十四年八月に帰国されてから石川県警に十年近く勤めて、現在は夫人とお二人で悠々自適な生活を送っているが、筆まめな方で、暇が出来たのを幸い青春時代の回顧を克明に記録して、まずハイラルの兵隊時代の日々を『かかしの兵隊』と題されて平成四年に、また、アンジェルカの辛苦の明け暮れを『シベリアの勲章』と題されて平成六年に自家出版されている。それぞれ叙述に微苦笑を誘われるが、その笑いのウラに滲み出てくる悲しみは、抑留体験者ばかりではなく、戦争を知らない若い読者にもきつと心打たれるものがあるに違いない。

(石川県 永井 正三)